

たぐみ

Craftsmanship

特集 奥会津三島町生活工芸品展

第27号

見直したい 桐箆笥の素晴らしさ

私の家に古い桐箆笥がいくつかある。いちばん古い総桐五重の品は、引き出しの中央部分に四寸(十二センチ)ほどの円形の金具があり、太目の引き手とあいまって、薄い淡褐色の木肌と黒い金具の調和がなんとも美しい。

この箆笥は二段重ねだが、下段の裏に「明治六年 東京府湯島 某々造」と墨痕鮮やかに記されていて江戸職人の系統の作だとわかる。

ほかにわが家には明治後期、昭和初期、戦後と三代にわたる嫁入道具の桐箆笥の何点かが今なお残されている。じつは私事で恐縮だが戦前からの拙宅は、昭和四十八年十二月に失火から全焼してしまったのであった。

消防署の発表でも全焼であったが、しかし消火活動によって桐箆笥のいくつかだけが辛うじて焼け残ったのである。桐のような多孔材は断熱性が高い

ため火がつきにくく、消火の際の強い放水にも耐えて収納の品も含めて汚損されることが少ない。

桐箆笥のこのような優れた特性は、聞いてはいたものの実際に体験してみてもはじめて納得したのであった。わが家でもそのあと専門の職人に修理に出し、表面も見違えるほどになって今なお本来の役目を果してもらっている。

このたびはたぐみで「生活工芸展」を開かせていただく奥会津の三島町は、日本有数の桐材の産地である。会津桐の名で知られるが、「樹の事典」(朝日新聞社)によると「日本産材中最も軽軟で、狂いが少なく、吸湿、吸水性が小さく断熱性が大きい。家具、とくに箆笥、建具、小箱、琴などの楽器や仮面など特殊の用途も多い」とある。近年、大量に輸入、消費されている南米や台湾産の桐材は種属も異なり材質も劣るといふ。このさい会津桐の製品の本当の良さを見直したいものである。

(志賀直邦)

特別展

奥会津三島町生活工芸品展 in 銀座

会期 平成十八年九月十六日(土)～二十一日(木)

九月十七日(日)、十八日(敬老の日)は営業いたしません。

会場 たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から十九時まで(日祝日・最終日は十七時半まで)

主催 奥会津三島編組品振興協議会



ヒロコ、山ブドウ、マタタビの編み組細工

山ブドウと私

五十嵐 三美

工芸品にまったく興味を示さなかった私が山ブドウ籠を作るようになって。以前の私を知る人にとっては信じられない事でしょう。冬はスキー。夏は釣り。これが私の休暇の過ごし方でした。「釣りきち」、「浜ちゃん」の愛称が当時の私そのままであり、現在も時々その愛称で呼ばれることもありま

す。私が山ブドウ細工に興味を示したの

は、人事異動で生活工芸館に勤務することになって二年目からです。ヒロコで作った帽子を被ればイワナ(溪流の魚)が今まで以上に釣れそうな気がしたので、ヒロコ製作の指導員に製作をお願いしたところ、ヒロコ繩を約一〇〇メートル纏って来いと言われてました。それから一〇日間の間、仕事が終わってから深夜までヒロコ繩を纏いしました。その繩で帽子を作っていたのですが、もったいなくて一度も使っていません。「一〇日も繩を纏ったのだから山ブドウも出来るかな?」そう思ったのが、山ブドウ細工を始める機会になりました。イワナが生息するような深山には山ブドウが自生しているのです、山ブドウ皮の剥ける時期には、イワナと一緒に山ブドウ皮も背負って帰るようになりました。

物作り教室は冬に開催されるので、とりあえず展示されている作品を観察しながら作ることにしました。数個

作ったのですが、作った物は隙間だけで形も崩れた物でした。

物作りを初めて体験した私にとって、これは大変に楽しいことでした。それからは、家に帰ってから山ブドウ細工が楽しみになり、深夜まで毎日山ブドウ細工を行うようになりました。「寝る間もいたましい」とはこのようなことかと思いました。そうこうしながら数十個と作っているうちに次第にコツが分かるようになってくると、仕事中でも山ブドウが思い浮かぶようになります。作り始めてからの二年間は、面白いだけでガムシヤラに作りましたが、現在は少し上達したのでしょうか？材料にこだわるようになりました。良い材料を見つけ、本当に良い採取時期まで幾度となく山に通い、その材料をよく水で洗って幅揃えを行い、その中から皮の厚さや艶によって何段階にも皮を選別する。現在の製作は、お客様のニーズに合わせた物を作

るというよりは、自分の作りたいものを楽しみながら作る。という製作スタイルをとっています。

三島町では、大勢の人が長年の山ブドウ皮工芸品製作を行ってきました。そのため、町内での材料は今後数年間しか採取できない状況です。町では、四年前から山ブドウ苗の生産を試みました。その成果もあり、現在では町内の業者が栽培を行うようになりま

三島町と私

五十嵐 照枝

四年前より現職に就いている。木工は大学卒業後、飛騨高山で二年間学んできた。今年で七年目になる。よく質問されることが「なぜ木工を志したのか？」と「三島に戻った理由は？」である。

大学時代は社会学を専攻し、地域計

した。栽培計画は毎年一、〇〇〇本を山地に植栽する計画です。昨年一、〇〇〇本を植栽し、今年も一、〇〇〇本の苗が植栽を待っています。

私も個人で、毎年五〇本の苗を植栽していますが、作る楽しみと育てる楽しみで現在の生活に「満足」しています。実が付くようになれば、別な楽しみも加わってくるでしょう。

(三島町生活工芸館副館長)

画研究室に籍をおいていた。その時、常に頭にあつたのは三島町の存在である。ふるさと運動の展開と衰退、歯止めのかかない過疎化、超少子高齢化。それらの改善策を私なりに模索していた。その中で感じたことは、傍から齒軋りしても何も変わらないことである。恩師には「地元の人々による努力の結果が現状であるのでは」と諭され、自分の無力さを感じた。とにかく、現場に踏み込むことが第一歩であり、



ヒロ口のバッグを編むようす

同じ苦労を経験して初めて共感を得られると思った。

では、何を仕事にして三島に戻るのか考えた。アルバイトの経験から企業は敬遠したいと思っていた。そして、社会貢献を肌で感じられる職を探した時に、山村に豊富な自然を相手にした仕事がしたいと思ったのである。その後、飛騨高山の学校の存在を知り、そ

こで木工および山林の基本を学び、順調に三島に戻ることができた。

ものづくりの伝承・振興を図る「生活工芸運動」は昭和四十九年に始まった観光・交流事業「ふるさと運動」の第二弾として昭和五十六年から開始された。その後、勤務先となる生活工芸館が拠点施設として昭和六十一年に開館した。

私も小学校時代からこの施設で体験

三島町の生活

菊地 陽子

三島町に移住してきてもうすぐ一年半の月日が経とうとしている。自然の豊かなところで暮らしたいと、結婚を機に三島町へ。毎日の満員電車からも解放され、憧れの田舎暮らしを満喫している。以前、北海道にも住んでいたことがあるため少しは田舎暮らしを理

学習をして育った。昭和五十三年生れの人生は生活工芸運動と時代を同じくしていた。ものづくりの道で三島に戻ってきたのは大人たちの地域づくりへの情熱がしつかりと伝わっていたからだと思う。

三島での生活は楽しい。人との関係が濃い。時々嫌気もさすですが、それ以上に貴重な空間である。

(三島町生活工芸館木工指導員)

解していると思っていたが、驚くことばかりである。職場の人も個性豊かな人達ばかりで、岩魚釣りのMさん、またぎのKさん、若い女性にして丁寧な木工仕事をするTさんと、まるで夏目漱石の小説にでもできそうな顔ぶれである。また、同じ苗字の人が多いため、町の人みんな下の名前がよくあっている。また、ものづくりをしている人の数が多いことにも驚いた。三島町ではものづくりしている人のこと

を「工人(こうじん)」と呼ぶ。

ものづくりの精神は、自然と共存してきた歴史から生まれたと言っても過言ではないだろう。志津倉山、三坂山の山々に抱かれ、尾瀬沼を水源とする只見川に育まれ、古くは縄文、弥生の古来よりの文化がある。荒屋敷遺跡からは縄文時代の籠などの遺物が出土している。本当に長い年月を経て、親から子へと受け継がれてきたのだなあと感じる。三島町は冬になると三メートルにも積雪が及ぶ豪雪地帯であり、その自然環境を活かした生活の営みが続けられている。春から秋にかけて畑仕事や山ブドウ・ヒロロ・マタタビ・アケビなどの材料の採取をおこない、時には山菜を採り、きのこを採り、魚を釣り、そして、冬になると家の中でものづくりをする。春を待ちながら…。雪もものづくりが発展してきた重要な要素なのだ。

また、自然への感謝、神への感謝の

気持ちを含めて行う年中行事が数多くある。一年の厄除けを行う「さいの神」、雛流し、虫送り、山の神講、鳥追いなどである。年中行事が多くある背景には豊かな自然を享受し、共に生きる事を大事にした先人達の知恵が感じられる。工人たちが継承する技は、そんな豊かな自然への感謝も作品を通じて感じとる事が出来る。

ものづくりをしている人のほとんどは高齢者であるが、とても元気だ。楽しんでものづくりをし、とても生き生きとしている。その手から生み出されるぬくもりある作品は自然がとけこんだかのようだ。手づくりの幸せを実感する。自然のサイクルの中での営み、自然への感謝、人と人とのつながり、これらから三島町のものづくり精神は生まれてきたのだろう。

ここ三島町は、まさに緑豊かな自然と太古の昔からの歴史と文化の宝庫なのである。(三島町生活工芸館勤務)



伝統的工芸品指定にかかる関係者と三島町の人たち。平成15年8月、間方集会所にて。

三島町のあゆみ

笠原 勝

昭和五十九年の夏のことと思う。夏休みを利用して会津を巡った。新藤原で自転車を組み立て、田島、湯野上、会津若松、喜多方、熱塩、坂下と廻り柳井津から三島町に入った。



三島町生活工芸館

三島町ではまだ「生活工芸館」も出来ておらず、町役場の一部に工芸品が並んでいたような記憶がある。カシヤ猫、雪踏み俵、かんじき、スカリ、ゲンベ、マタタビ箆などが記憶に残っている。

その後、仕事で訪れた「生活工芸品展」の折には会終了後に肉屋の奥座敷で開かれた宴会に参加させていただいた。千葉大学の宮崎先生をはじめ、若い町職員の熱い語らいがあった。その時だったか、翌年だったか佐藤長雄町長(当時)と宮崎先生と夕食を一緒にさせていただいた。町長は高齢化、過疎、豪雪のこの町に「それでもこの町に生まれ育ち、生活することが良かった」と思える町づくりを熱く語られた。それから二十数年、毎年この町に通

うことになった。拙いながら各地の編組品情報を伝えてきた。行政も良くこの運動を支援した。斎藤茂樹町長の運動に掛ける熱意は平成十五年に「奥会津編み組細工」として国の伝統的工芸品の指定に漕ぎ着けた。冬場の手仕事を産業にまで育てたのである。

小規模ながら産業としてこれから立ち上げていくためには数々の困難があり、決して平坦な道ではないとおもう。後継者、品質、材料、流通等の問題。それでもこの町には乗り越えていくだけの力がある。それはあせらず、急がず、等身大の運動を行ってきた力だと思ふ。

今回のたくみの会では一人でも多くの方々に会津三島町のことを知っていただきたい。そして是非一度は訪ねていただきたい。歳時記の里とも呼ばれる年中行事が引き継がれている町で生活の一つの有り様を見ていただきたい。

(たくみ)

「アジア民族造形ネットワーク」の創設と展開 (五)

金子 量重

アジア文化外交の絆 「国立アジア

生活文化博物館」設立への道

子供のころから見続けた東京帝室博物館は、「人とももの」との関わりについて私に夢を抱かせてくれた。だが長ずるに及び、東京、奈良、京都国立博物館ともに、古代から十九世紀までと決め込んで、特定の主題に限定した考古と美術史に偏りすぎた。古色蒼然たる展示を七十年も続けている陋習に疑問を感じる。国立博物館は専門家などを意識せず、幼稚園児から老人にいたるまで、あらゆる年齢層の国民のために、「もの」の展示を通じて平易に解説する生涯教育の重要拠点で、大学教育とは目的が全く異なる。

日本民族がいかに地域の暮らしに根ざした創造と造形力を発揮して暮らし

の基盤を築いたか。周辺諸民族から何を受け入れ何を拒否し、英知の限りを尽くしていかに日本化したか。現代までの推移を具体的に紹介するのが国立博物館の使命、いたずらに考古と美術史に偏っては成果を得られない。それに加え二十一世紀はアジアの時代にふさわしい、諸民族の生活像を具体的に紹介するための意識改革も必要。日本には時代を先取りできる優れた館長やスタッフがいらないようだ。これでは本質を見失って、国民のための博物館とはいえない。

これに情熱を傾け既成の陋習や「もの」の評価に惑わされず、常に時代への洞察力と新しい発見を心がけ、優れた展示のできる人材にこそ、館長への昇進の機会を開くべきだ。疑惑のメカ

ニズムたる。天下り“が、国民に強い不信任を抱かせている、法人理事長や館長への天下りはしない手本を、教育を司る文科省が真つ先に示されよ。因みに韓国国立中央博物館長は公募制で、大統領が任命する。

韓国、九州、ベトナム館へ

『アジアの民俗造形』を寄贈

十年ほど前に国連の「アジア無形文化財保存国際会議」で、私は「国立博物館はもはや自国の展示だけにとどまらず、アジア諸民族の生活文化の展示を推進されたい」との主張を強く訴えた。真つ先に賛意を表明したのは、ベトナム民族学博物館長のグエン・パン・フィ博士。次いでフィリピン国立歴史研究所長のセラフィン・キアソン博士。

二〇〇一年二月、韓国国立中央博物館池健吉館長は、「新設館ではアジアに焦点をあてるので、研究資料の「アジアの民族造形」を寄贈してほしい」と熱望された。わが親友の郭少晋を全権大使に委嘱し、同館の閔丙勲学芸研究官を伴って来宅した。館長はまさに

ソンビ(儒教的賢者)らしく、礼のこもった挨拶に喜んで承諾した。古代以来、韓国より多大な文化的恩恵を蒙ったことへの、ささやかな恩返しに役立てばと思う。わが寄贈資料(一、〇三〇点)は関、蔣尚勲両氏が担当し、来宅して民族造形について学び、寄贈資料の確認作業を行う。

李建茂館長は二〇〇三年七月二十二日から八月十七日まで、景福宮内の旧館で国民へのお披露目として「金子量重寄贈亜細亜民族造形特別展」を開催した。ポスターを全国に配布し会場周辺には大きな幟を立てて、国民に呼びかけ三十六万人が入場した。同時に刊行した豪華な図録は日本各界の知人や友人に贈った。周囲から「なぜ貴重な資料を国外へ出してしまったか」との声が起こった。だがそれは違う。

人類共有の民族造形であるからには、内外問わずその価値を正しく評価し、的確に展示して国民にアジア諸民族の生活文化を構成するもの“の価値を、伝達できる人材の有無こそ重要

な条件である。韓国の偉業と周辺の声にあわてた文化庁は、「二〇〇五年開館予定の九州国立博物館は、日本文化の形成をアジア史的な観点から捉えるので、ぜひアジアの民族造形のご寄贈を」と急遽申し出た。直ちに文化庁の鍋島豊君及び副館長の宮島新一君と渉外課長の浅井浩文君が来宅した。その後三輪嘉六館長は韓国同様『金子量重記念室』を開設し、永遠に存続すると、まもなく丁寧な確約書を送ってきたので了承。

その上で国立博物館にはアジアの専門家がいないので、優れた館員の派遣を要望。館長は楠井隆志、猪熊兼樹両君を、二〇〇四年十月からわが家に来訪させた。

私はまづ政府の誤ったアジアの地理区分を排し、前述の東北、東南、南、西の四区分(本誌25号参照)の認識からはじめた。アジアは国を基盤で支える「民族」の存在を確認し、さらに食料や造形素材を得る自然環境と生活文化との関わりを説明。それを解く鍵と

なる民族造形の手ほどきをした。彼らはよく学び、もの“を熟視することを覚えた。両君は「資料は博物館や図録でも見たことがない」と目を輝かせた。さらに海外での実地研修を提案し、二〇〇五年二月には優れた匠の心と技を残すミャンマーを訪れた。日本は英国籍のスーチャーに幻惑されて、交流を断絶しているのは誤り、積極的な援助協力が急務。

私は二十数年に及び国内のほぼ全域を歩き、近代化を急がぬが故に『民族造形の宝庫』を実感。友人のキム・モン・ニユン博士をはじめ、バガンでは国立考古博物館や国立漆器専門学校を見学。その上で監胎献饌用食籠造りの漆匠コー・ティンテー及び、木胎漆塗り屏風造りの女匠マ・アエアエマーの仕事場へ案内。水道がないので貯水用大甕を二百年焼成している、トゥワンテー大窯と周辺の民家やボージョー市場など、民族性豊かな暮らしの源泉を紹介。日本では想像できない貴重な経験と学習ができた喜び。彼らの熱意

に配慮、わが博物館にアジア認識がで
きる有能な人材養成のためにも、さら
に東北、南、西アジアでの研修を強く
要望。館長は十分に理解したようだ。

二〇〇四年七月ベトナム民族学博物
館を訪問。フイ館長は設計図を見せな
がら、「あなたの意見に賛成して、二
〇〇八年には館内に『アジア館』を新
設するのでぜひ寄贈を」と申し出た。
ベトナム社会科学院長官ホアイ・ナム
博士からの公式文書も届き快諾。昨年
八月館長は、アジア部のグエン・フオ
ン副部長が来宅。満面に笑みをたたえ
て資料を持ち帰る。本年四月にはグエ
ン・マエ修復部長とグエン・フォンが
来宅。寄贈資料（五五〇点）のすべて
を運んだ。三館への寄贈は終了。

アジアなど「他者に視線を向ける」

ケ・ブランリ美術館パリに誕生

ジャック・シラク大統領はフランス
が所蔵するアジア、アフリカ、南太平
洋諸島や中南米の生活文化を支えた民
族造形に対し「あまりにも長く不遇の
時代にあった美術や文明の地位を回復

したい」との意思と「生活文化と人の
平等な尊厳を十分に示す平和実現の道
具」になることを望んで、六月二十日
にセーヌ川のほとり、エッフェル塔の
ふもとの二五、〇〇〇平方メートルの
敷地に、三〇万点を蔵する「ケ・ブラ
ンリ美術館」(Musée du quai Branly)
を開館した。開館式には国連アナン事
務総長をはじめ、世界から多彩の人々
が参加。まさに二十一世紀の初頭を飾
る世界的な大慶事であり、大統領の文
化に対する高い見識と慧眼の象徴とい
えよう。前号で紹介したシンガポールの
「アジア文明博物館」といい、「アジ
アの時代」を先取りした点で、みごと
に日本を追い抜いた感じが強い。確かに
第一ラウンドでは出遅れたが、彼らを
よく観察しながら直ちに第二ラウンド
で、日本の実力を発揮することが肝要。

「アジア民族造形ネットワーク」

システム」の創設と展開

私は昨年研究所や学会を中心に、日
韓越三館への寄贈を契機に『アジア民
族造形ネットワークシステム』を構想

してきた。すでに二〇〇五年十月十五
日には九州が、二十八日には韓国がそ
れぞれ開館し、『金量子量重宝』を開設
された。韓国の開館式では、インドネ
シア文化観光省のジェロ・ワチク大臣
は、数名を伴ってわが寄贈室にこれら
の貴重な資料が陳列された」と喜ん
だ。

また館長主催の晩餐会では、オラン
ダ・ライデンの国立民族学博物館長ス
ティブン・エンゲルス博士は「魅力的
なアジアの民族造形の寄贈に敬意を表
する。韓国は幸せだ」と述べた。カン
ボジア・ユネスコ委員会のエティネ・
クレメント代表やイタリア・ジェノバ
の日本美術館長のファイツラ・ドナ
テツラ博士からも挨拶を受けた。アジ
ア諸民族の生活文化を前面に掲げた韓
日両館は、二〜三ヶ月間に百万人の入
場者があった。

まず研究所と学会、九州、韓国、ベ
トナム三館の担当者を含む、「アジア
の民族造形」に関する研究集会を行う

ことを館長各位に提案した。まず三館は相互に巡回して展示の知恵を出し合うなど、交流を深める。将来はアジア各国の博物館や専門家をはじめ、アジアの民族造形を展示する、世界の博物館にも積極的な参加を求めたい。

旧来の芸芸部長のもとの考古、美術、陶磁、染織といった、縄張り臭強く風通しの悪い縦割りの管理体制は改廃。新たに生活文化部の下に、衣、食、住、信仰、学び、芸能、遊び、生産、交易といった、アジア諸民族の生活文化の全体像が見渡せる体制を発足されることを切望する。

「衣」であれば、アジア諸民族の冠から着物や結髪化粧や履物にいたる広い範囲に精通することが条件。従来のように学問一辺倒の「専門」という狭い穴ぼこに閉じこもることは、新しい国民のための博物館では許されまい。日本人はもとより、諸民族の日常生活の暮らしぶりを、ものに語らせる「ものがたり博物館」として、国民にわかり易く見せることで歴史的、空間

的にも重要なアジア認識は深まろう。また未来の暮らしを支える、創造力の糧とする方向づけも重要だ。

新しい博物館像を拓いた

九州国立博物館

わが国には国立西洋美術館はあるが、国立アジア博物館がないのは日本の恥だ。九州国立博物館設立由来をひもとくと、三浦朱門元文化庁長官は「九州国立アジア文明博物館」を提案されたようだが、それは幻のごとく消え去った。これはまことに先見性に満ちた提案だが、なぜ実現しなかったのか。これに代わる存在として、自由のなかで有能なスタッフに恵まれ、順風満帆で九州国立博物館は船出した。原田ゆかり君ら優れた若手館員による「うらま ちゅら島 琉球展」は、小島なるがゆえに、日本、中国、韓国、東南アジア諸国と交易した琉球民族の優雅にして逞しく生き抜いた姿を展開した。まことに見ごたえのある展覧会の実現を高く評価したい。まさに「勇将の下に弱卒なし」を実感。

九州館は既設三館には見られない新しい国立博物館像を切り拓いた。楠井、猪熊両君を中心に、アジアの民族造形への関心を高めつつある若手諸君は、「アジア外交を積極的に展開する」日本との進路にとって、文化交流面でまことに心強い存在となる。彼らの情熱はさらに韓国国立中央博物館の展示品を含む、本格的な「アジア民族造形展」を特別展示室で開催したいとの声を聞いた。これぞシンガポールやフランスとは違う、日本が世界に示す第二ラウンドでの、実力発揮の絶好の機会となると確信。「アジア」の幟を高々と立てて大海を着実に突き進む、三輪館長の実績は万人の認めるところ。将来「国立アジア生活文化博物館」設立への新しい道の開拓にも、豊かな経験をもとに貢献されるよう大きな期待を寄せたい。「アジア民族造形ネットワークシステム」は、その実現に役立つものと確信している。

(終り)

(アジア民族造形文化研究所所長)

色落ちする藍染木綿を手にして (二)

吉本 力
雷蔵

手織りですと、織り賃の関係で機械

織りより高いのは当然なのですが、織り手の人たちは、染めも良心的な染めをしていますから、合成インディゴを大量に入れる紺屋さんへは頼みません。染め賃は十倍も高くつき、糸一口の染め賃が七千円〜一万円つきます。一キロの糸の量は、ほぼ一反分に相当しますから、糸代・織り賃を加えた手織りの布は、織り手の原価が、一反二万円〜三万円になります。そうすれば、小売値として一反十万円近くなっても、高いとは言えないことになります。機械織りでも、良心的な藍染め木綿なら一反五万円しても、不思議ではありません。

「色止め」として、いろいろな方法を、人から聞いた話として言ってくださる方がありますが、糸や布の表面に無駄に付着しているインディゴは、色としても本当の美しさではありませんし、まわりのものを汚しますから、「落ちるものを止める」ということを考えるよりも、洗って落とすことを考えるのが最も賢明と思われれます。無駄なインディゴを洗い落とせば、正味の染まった美しい色が現れますから、その色を楽しみましょう。

ここで注意して頂きたいことがあります。化学染料で染めた一メートル五百円程度の木綿を四千円で藍染木綿

と思わせて売っている例があります。また、化学染料で染めておいて藍甕に二〜三回浸けて藍のおいをつけ、藍染木綿として売っているものもあります。このような二セモノとは違います。機械織りの藍染木綿に安いものがあり、そのほとんどすべてが、水洗いせずに一般市場に売り出されています。糊がきいていますからゴワゴワしているの、水洗いしないことはすぐわかります。自分で水洗いするとなると何十回も洗うことになりましよう。

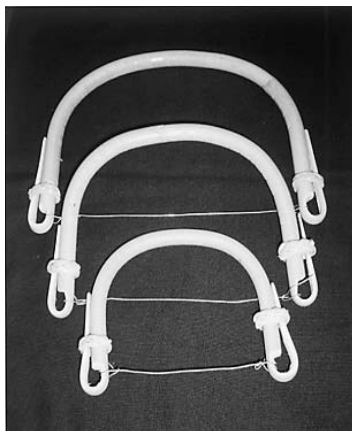
藍染に興味を持った方には、ぜひ本物に触れて、見るだけでなく、自分の手で使い、使い込んでいく中で、新品のときの美しさから、使い込んで生まれてくる美しさへの変化を楽しんで頂きたいものです。

(完)
(さくらさや主宰)

たくみ歳時記 籐の土瓶づる

土瓶を作る窯は日本各地にあった。益子、丹波、伊賀丸柱、香西、母里、出西、白石、小鹿田、沖繩などがその代表で、一昔前にはもっと多くの窯で作られていたであろう。

益子の濱田庄司先生も共手土瓶とともに籐づるの土瓶を作っていた。長い使用に耐えた弦も味わいを増し、作品の一部となっていた。



籐の土瓶づる

上から	六寸	2,000円
	四・五寸	1,800円
	三・五寸	1,600円

新橋から店を移転した折に出かけ、再度無理な願いをし、この度写真の三種類だけ作ってもらうことができました。六寸は少々細かいかもしれないが上々の出来である。(K)

あとがき

藤本巧さんは写真家である。二十歳前から韓国の人と風土を撮りつづけてきたという。その巧さんが一九六九年から二〇〇六年までの仕事の集大成として、初夏のころ「韓くに、風と人の記録」を上梓された。

巧さんの影像是、韓国の人と風土を在るままに、その深い心象ごと写し撮る。そしていつ見ても常に新しい感動を呼びおこすのである。

それだけではない。この本には彼が敬愛する十数人の人たちの、韓くにへの思いが抜粋で収められている。鶴見俊輔、立原正秋、大島渚、金石範、金達寿、岡本太郎、中上健次、中野重治などだが、いずれも影像と併せ読んで倦むことがない。フィルムアート社刊、たくみ、民藝館へお問い合わせを。(S)

発行

株式会社たくみ

東京都中央区銀座八ー四ー二

発行責任者 志賀直邦

電話

〇三ー三五七ー二〇一七

FAX

〇三ー三五七ー二一六九

振替

〇〇一ー〇一ー三五六五九

定価 六〇円(税込)